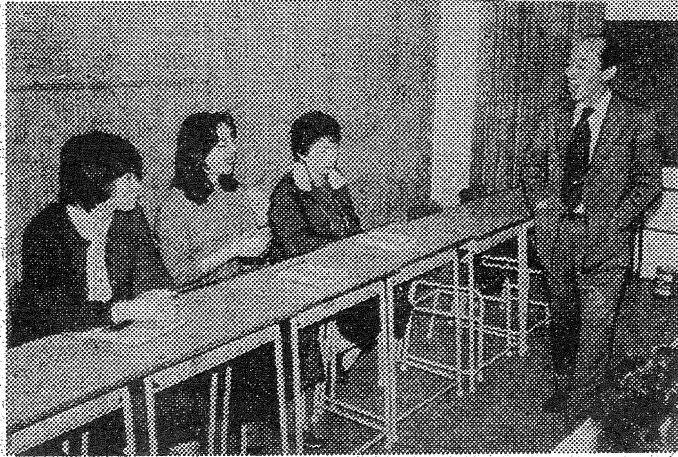


# なぜ英語が話せないの

〈28〉



生きた英語に挑戦するOLが年々が増えている  
(実践英語セミナーで)

「中、高校教師の八割は厳密 筑後地区の若手教師の相互啓発に言えど英語が話せない」(福 田昇八、熊本大学教授) 現状を、など、先生を対象にした研修会脱するため、各地で民間主導型の機会が多い。

実用英語が話せる教師は、この努力が着々と実を結び、確かに増えている。だが、入

試にヒアリング問題が導入されない限り、前進は望み薄。試験に出ないヒアリングでは、生徒が軽視し父兄も授業で会話に時間をとられるのに、拒否反応を示すだろうからである。入試改革の遅れは、しかしながら深刻な影響をもたらしている。

久留米市東町にある実践英語セミナー(ここでは学生時代、英語を何のために勉強したかわからない)と嘆くサラリーマンやOLが再度、英語に挑戦している。ただ今回は読む、書き、文法を離れて実用会話中心の勉強。教室内は活発な会話でいきいきしている。

「中学から大学まで十年間も英語を学んで、話せる会話といえは、アイ・アム・ア・ポイン・ト・ミス・イース・ア・ペンだけでした」——OLの一人は後悔の念を自嘲(ちやうく)きみに述べた。

この点、戸田昭一・同セミナー学院長(以下)「わが国の英語教育の最大の問題は、会話無視の入試制度によるもの断言である。

いかに教師が実用会話能力を高めても、入試が改善されねば、同じ悲劇は今後も際限なく繰り返される、との見解だ。

「全国六千カ所を廻る受験

大学、この入試なら不公平さはかなり解消され、ヒアリングは出題できる。公立高校でも受験生は志望校(と)に受験するケースが大半で、県当局が懸念するほどの問題はない。

戸田学院長は、九州で公立高校入試にヒアリングを導入してない福岡、熊本県に「要するに当局のやる気のなきが原因」と強調する。

公立高校入試にヒアリングを出題しているのは二十八道県(五九・六割)。九州でも大分県が四十二年、長崎県が四十八年から二十年以上前からヒアリングを出題。実施員の担当者「ヒアリング導入で、予想されたトラブルは一度もなかった」(長崎県)と口をそろえている。

これに対し、福岡県は「今のところ、導入の考えはない」と消極的な姿勢を示し、熊本県は「目下、検討中」の段階。福岡県が実施に踏み切らない理由として、田中壮一郎・県教育庁指導一課長は「受験生間に不公平問題が生じる」と語るだけで「実施した場合、予想される各問題についての具体的な調査、予算面の試算、先進県からの事情聴取は一切行っていない」と回答。やる気のなきを露呈して

## 会話無視の入試制度 試験に出ないので軽視

会場で、三十六万人が受験する共通一次試験の場合同、工場や自動車騒音など会場を取り巻く環境の違いなどで、公平なテストは無理かもしれない。でも各